

令和 4 年 4 月 19 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K11069

研究課題名(和文)入院中の病児をもつ家族用家族機能・家族支援質問票の開発と信頼性・妥当性の検討

研究課題名(英文) Development of a Family Functioning/Family Support Scale for Families with Hospitalized Children and Evaluation of its Reliability and Validity

研究代表者

松木 優子(平谷優子)(MATSUKI (HIRATANI), Yuko)

大阪市立大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号：60552750

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：入院中の病児をもつ家族を対象とする家族機能・家族支援尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検証することを目的とした。入院中の病児をもつ家族の家族機能研究の成果と文献検討の結果から項目精選を行い、尺度を作成した。これは、19項目で構成される自記式質問紙である。1箇所の小児病棟で質問紙調査を実施し尺度を修正した後、入院中の病児の母親を対象に信頼性と妥当性を確認するためのインターネットモニター調査を実施した。その結果、上位-下位分析では全項目において上位群と下位群の得点に有意差が認められた。Cronbachの係数は0.96であった。因子分析の結果、2因子構造であることが確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

入院中の病児をもつ家族と地域で生活する子どもをもつ家族では家族機能が異なることが明らかにされているが、入院中の病児をもつ家族を対象とする家族機能尺度は存在しない。地域で生活する子どもをもつ家族を対象として開発された家族機能尺度には、病児への付き添いや面会、家族役割の調整などが必要な入院中の病児をもつ家族に特徴的な項目が含まれていない。本尺度は入院中の病児をもつ家族を基盤に作成しているため、このような家族に適している。本尺度は2因子構造であり、入院生活と地域生活の両方について評価できる。本尺度を用いることで、家族の家族機能や家族支援ニーズに応じた家族支援が可能となる。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to develop a family functioning/family support scale for families with hospitalized children and to evaluate its reliability and validity. Items were selected through family functioning studies and literature reviews about a family with hospitalized children, and the scale was constructed. It is structured as a self-administered questionnaire composed of 19 items. For the preparation, a questionnaire survey was conducted for mothers with hospitalized children in one pediatric ward. After we revised this scale, internet survey was conducted to evaluate its reliability and validity. The participants were mothers with hospitalized children.

When the scale was administered to mothers, significant differences were observed between good and poor groups for all items in the good-poor analysis. Cronbach's alpha coefficient was 0.96. Having examined the construct validity, two factors were obtained from factor analysis.

研究分野：医歯薬学

キーワード：尺度開発 病児 入院 家族機能

## 1. 研究開始当初の背景

子どもが入院するという出来事に家族が直面すると、家族にストレスが生じ、入院後の家族機能は変動する。家族支援の目的は家族機能の維持・向上にあるため(法橋, 堀口, 樋上, 2010), 看護師は家族の家族機能レベルをアセスメントし、家族機能の維持・向上を目的に、家族のニーズに応じて家族支援を実践する必要がある。

入院中の病児をもつ家族と地域で生活する子どもをもつ家族では家族機能が異なることが明らかにされているが(平谷, 法橋, 2017), 入院中の病児をもつ家族を対象とする家族機能尺度は見当たらない。また、入院中の病児をもつ家族の家族機能に関する先行研究により、既に明らかにされた知見があるが(平谷, 億田, 杉中他, 2017; 平谷, 法橋, 2017), 家族看護学における課題として研究成果が臨床看護師によって技術として社会に還元されにくいことが指摘されている(山口, 2010)。

## 2. 研究の目的

本研究では、過去に蓄積された研究成果を活用して入院中の病児をもつ家族に特化した尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検証することとした。これにより、研究の知見を臨地現場で活用可能な形でフィードバックするとともに、臨地現場における研究成果活用の促進と入院中の病児をもつ家族への的確な家族支援の一助とすることとした。

## 3. 研究の方法

尺度開発のための事前準備として、(1)入院中の病児をもつ家族の家族機能と家族支援に関する文献検討を行った。本研究では、入院中の病児をもつ家族の家族機能に関する医学・看護学領域の文献を検討し、家族機能の維持・向上に寄与する家族支援を明らかにすることを目的とした。また、入院中の病児をもつ家族の家族機能に関する先行研究の知見を整理することとした。

さらに、(2)臨地の看護師が活用できる実践方法を十分に理解するために、研究成果活用に対する看護師の認識を質的に明らかにした。本研究では、小児看護実践における研究成果活用の現状と促進に対する看護師の認識を明らかにすることを目的に、看護師を対象とした Focus Group Interview (FGI) を実施した。

最後に、(3)入院中の病児をもつ家族に特化した尺度の開発とその有効性の検討を行った。既存の入院中の病児をもつ家族の家族機能研究の成果(平谷, 億田, 杉中他, 2017; 平谷, 法橋, 2017)と家族機能と家族支援に関する文献検討の結果(平谷, 伊瀬, 2020)をアイテムプールとして項目精選を行い、入院中の病児をもつ家族を対象とする家族機能・家族支援質問票を作成した。これは、18項目の単回答型質問と1項目の自由回答型質問で構成される自記式質問紙である。得点には影響しないが、各項目の支援ニーズについても確認できる。表面的妥当性は研究者3名で確認した。1箇所の小児病棟でプレテストを実施し、尺度を修正した後、入院中の満12歳までの病児の母親を対象に信頼性と妥当性を確認するためのインターネットモニター調査を実施した。

## 4. 研究成果

### (1) 入院中の病児をもつ家族の家族機能と家族支援に関する文献検討

医中誌 Web を利用して、「1946年以前」から「2019年」の原著論文を検索した結果、対象文献は8本で、これらを内容分析したところ、家族機能の維持・向上に寄与する家族支援として、【家族と家族環境の関係の把握と調整】【家族が過ごしやすい病棟環境の整備】【ファミリーハウスの機能の拡充】【病児の父親支援】【家族のセルフケア支援】【安心して病児を預けられる看護体制の構築】【家族への説明と情報提供】【病児の入院に伴う心配事への相談支援】【家族への精神的支援】【夫婦関係への支援】の10の家族支援が明らかになった。

【家族と家族環境の関係の把握と調整】とは、包括的に家族を捉え、家族と家族環境の関係を把握してアセスメントし、調整する支援を表していた。【家族が過ごしやすい病棟環境の整備】とは、家族が過ごしやすい病棟環境を整えることで、家族の負担を軽減したり、家族のコミュニケーションを促進する支援を表していた。【ファミリーハウスの機能の拡充】とは、ファミリーハウスの機能を拡充することによりファミリーハウス利用家族のニーズを充足する支援を表していた。【病児の父親支援】とは、父親を含む家族全体への支援を意図して看護師が行う、父親への働きかけを表していた。【家族のセルフケア支援】とは、家族の対処能力を引き出し、家族のセルフケア力を高める支援を表していた。【安心して病児を預けられる看護体制の構築】とは、家族が病児を安心して預けられる看護体制を構築することで家族の生活や生活の質の向上に資する支援を表していた。【家族への説明と情報提供】とは、医師や他職種と連携し、家族に対して、子どもの入院に関連した内容の説明や情報提供を行う支援を表していた。【病児の入院に伴う心配事への相談支援】とは、病児の入院に伴う心配事の相談に乗り、家族の不安を軽減する支援を表していた。【家族への精神的支援】とは、病児と家族が入院という危機を乗り越えられるように、病児と家族との情緒的つながりを高めたり、入院体験の意味付けを促進する支援を表し

ていた。【夫婦関係への支援】とは、病児の入院が夫婦不和につながらないように、夫婦関係の維持・向上を目指して行う支援を表していた。

入院中の病児をもつ家族の家族機能については、質的または量的に、知見が明らかにされていた。入院中の病児をもつ家族は、子どもの入院に伴う家族の生活の変化に対して、家族の役割を調整し、まずは家族内で対処して家族機能を維持しようとするが、子どもの入院に伴う身体的・経済的負担や子どもの入院に関連した心配事の発生により、家族のみで対処できない場合は、社会資源と支援の取入れにより家族ニーズを充足していた。ただし、外部からの援助がない方が家族の凝集性は高く、同居家族内で病児の入院に対応している方がまとまっていると感じられやすい状況にあり、家族内で対処できる状況であれば必ずしも外部からの支援が家族機能の維持に有効ではないことが分かった。また、家族は、家族力を強化し、病児の入院という困難に立ち向かおうとしていたが、父親を対象とした調査では、病児入院中は拘束的で膠着した状態であり家庭内交流が不足していたとの報告もあり、家族力の強化については一定の見解は得られていなかった。病児の入院を契機に、家族のヘルスケア基盤が強化された一方で、生殖・娯楽機能は縮小していた。その他、家族機能は母親の付き添い期間により異なることや入院中の病児をもつ家族は、地域で生活する子どもをもつ家族と比較し家族機能が低く、子どもの入院により家族機能は低下していたことも明らかにされていた。病児の疾患を限定していない文献が大半であったが、入院中の小児がんの病児をもつ家族に焦点を当てて家族機能を調査した研究も存在し、家族機能の凝集性と小児がん病児の認知的疲労感との間には相関があることが明らかにされていた。

入院中の病児をもつ家族の家族機能に関する論文数は少ないため、今後、知見の蓄積が必要である。看護師は本研究で明らかになった10の家族支援を組み合わせることで、入院中の病児をもつ家族の家族機能の維持・向上に寄与することが求められる。

本研究結果は、家族看護学研究に論文投稿し、掲載された。

## (2) 小児看護実践における研究成果活用の現状と促進に対する看護師の認識

大学病院の小児病棟に勤務する看護師9名にFGIを実施した結果、研究成果活用の現状に対する認識として【研究成果活用は可能であり望ましい】【研究成果活用は簡単ではない】【研究成果物活用の課題が存在する】の3カテゴリーが、研究成果活用の促進に対する認識として【研究成果活用に向けて環境を整える必要がある】【研究成果物を活用するための課題を改善する必要がある】の2カテゴリーが明らかになった。

【研究成果活用は可能であり望ましい】のカテゴリーは、研究成果を活用しようと思えば活用でき、活用することが望ましいと看護師が認識していたことを表していた。【研究成果活用は簡単ではない】のカテゴリーは、研究成果活用のソフト面の要件や看護師のスキルが不足しており、このような状況下で研究成果活用に取り組むことへの負担感と意識のハードルがあるため、研究成果活用は簡単ではないと看護師が認識していたことを表していた。【研究成果物活用の課題が存在する】のカテゴリーは、研究成果物活用の課題について看護師が認識していたことを表していた。【研究成果活用に向けて環境を整える必要がある】のカテゴリーは、研究成果活用に向けて業務改善を行い、人的環境を整える必要があると看護師が認識していたことを表していた。【研究成果物を活用するための課題を改善する必要がある】のカテゴリーは、研究成果物の課題を改善し臨地現場で研究成果を活用するためには、研究成果物を読みたくするような工夫が必要であるが、これだけでは不十分で、研究成果物へのアクセシビリティを高める必要があると看護師が認識していたことを表していた。

本研究対象は、大学病院に勤務する看護師であり、研究をしたり研究成果を活用しようと思えばできる環境にあるものの、業務時間外に研究に取り組んだり学会等にプライベートな時間を使って私費で参加するのは負担があるため、看護師は、研究成果活用に向けて環境を整える余地があると認識していた。看護師は、研究成果活用の必要性や有用性は理解しているものの、臨地現場では通常の看護業務が優先であり、日々の業務に追われて時間も余裕もないと感じているため、研究成果を活用した、最善のケアにまで手が回らないと認識していた。臨地現場のニーズに合っていない研究テーマや研究成果物読解の難しさ、研究成果物を入手するまでの手間や費用がかかるなど研究やその成果物自体の課題もあり、研究成果を活用するよりも職場内で同僚や上司に相談する方が速やかによりよいケアを提供できると認識していた。今後、看護師が研究成果を活用し、病児と家族に最善の小児看護を提供するためには、研究成果物に無料ですぐアクセスできる環境や業務時間内に研究に取り組める体制の整備、看護師の意識の向上、研究成果物の提示の仕方を検討する必要があることが明らかになった。

本研究結果は、日本小児看護学会誌に論文投稿し、掲載された。

## (3) 入院中の病児をもつ家族を対象とする家族機能・家族支援質問票の開発と信頼性・妥当性の検討

入院中の満12歳までの病児の母親を対象としたインターネットモニター調査の結果、185名の有効回答が得られた。病児の入院日数の中央値は10.0±149.9日であった。入院の目的となる疾患は多岐に及んでいたが、喘息、胃腸炎の順に多かった。新尺度の得点分布を見ると、天井効果、床効果ともに認められず、上位-下位分析では全項目において上位群と下位群の得点に有意差が認められた。新尺度と既存の家族機能尺度であるFeetham家族機能調査日本語版（FFFS-

J)との相関は認められなかった。構成概念妥当性を確認するために行った因子分析の結果、2因子構造であることが確認できた。第1因子は、地域生活に関する内容、第2因子は入院生活に関する内容で構成されていた。Cronbachの係数は0.96であり、第1因子は0.94、第2因子は0.93であった。新尺度の1回目の回答から1週間以上2週間以内の間隔をおいた回答におけるSpearmanの順位相関係数は0.42であった。

尺度の弁別的妥当性、構成概念妥当性、内部整合信頼性について確認できたため、新尺度は信頼性・妥当性を具備した尺度であると言える。一方で、保育所に通う子どもをもつ家族を対象に開発されたFFFS-Jとの併存妥当性は確認できず、再テスト信頼性についても、十分な結果は得られなかった。新尺度は、入院生活に関する内容が多く含まれていることや、対象となった病児の疾患は急性疾患が多く、入院日数の中央値は10日であり、1週間以上の期間があくと病児の病状の変化に伴い、家族機能も変化する可能性が考えられる。今後、本尺度が、家族の家族機能や家族支援ニーズに応じた家族支援に寄与することを期待したい。

本研究結果は、学会発表での発表と論文投稿を予定している。

#### <引用文献>

- 平谷優子,法橋尚宏:入院中の子どもをもつ家族と地域で生活する子どもをもつ家族の家族機能の比較研究,家族看護学研究,23(1):2-14,2017
- 平谷優子,伊瀬薫:小児看護実践における研究成果活用の現状と促進に対する看護師の認識,日本小児看護学会誌,29:184-191,2020
- 平谷優子,億田真衣,杉中茉莉他:子どもの入院による子育て期家族の家族機能の変動:病児の家族への半構造化面接にもとづく質的分析,家族看護学研究,22(2):97-107,2017
- 法橋尚宏,堀口和子,樋上絵美:家族看護の場とパラダイム,法橋尚宏編集,新しい家族看護学理論・実践・研究,57-60,メヂカルフレンド社,東京,2010
- 山口桂子:研究と実践をつなぐもの:家族看護学の有機的な発展をめざして,日本家族看護学科第17回学会発表講演集,28,2010

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Yuko Hiratani, Naohiro Hohashi	4. 巻 63(5)
2. 論文標題 Family functioning of single-parent families with children attending a special needs school in Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Pediatrics International	6. 最初と最後の頁 581 - 588
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/ped.14486	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 平谷優子, 伊瀬薫	4. 巻 26(1)
2. 論文標題 入院中の病児をもつ家族の家族機能を維持・向上するための家族支援	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 家族看護学研究	6. 最初と最後の頁 67-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 平谷優子, 伊瀬薫	4. 巻 29
2. 論文標題 小児看護実践における研究成果活用の現状と促進に対する看護師の認識	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本小児看護学会誌	6. 最初と最後の頁 184-191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 平谷優子, 堀口和子, 法橋尚宏	4. 巻 25(2)
2. 論文標題 ひとり親家族等用家族機能尺度（Family Functioning Scale for Single-parent Families: FFSS）の開発と信頼性・妥当性の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 家族看護学研究	6. 最初と最後の頁 177 188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Yuko Hiratani, Kaoru Ise
2. 発表標題 Awareness of nurses on the current use and promotion of research findings in pediatric nursing care practice
3. 学会等名 Transcultural Nursing Society Conference in Japan 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 平谷優子, 伊瀬薫
2. 発表標題 入院中の病児をもつ家族の家族機能を維持・向上するための家族支援
3. 学会等名 日本小児看護学会第30回学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 平谷優子, 西元康世, 法橋尚宏
2. 発表標題 入院中の病児をもつ家族を対象とする家族機能尺度の開発と信頼性・妥当性の検討
3. 学会等名 日本家族看護学会第29回学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	法橋 尚宏  (HOHASHI Naohiro)  (60251229)	神戸大学・保健学研究科・教授    (14501)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西元 康世  (NISHIMOTO Yasuyo)  (60458015)	四天王寺大学・看護学部・講師    (34420)	
研究分担者	伊瀬 薫  (ISE Kaoru)  (30848726)	大阪市立大学・大学院看護学研究科・特任助教    (24402)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関